

福島県中学校教育研究会

特別活動部報

発行 令和4年3月4日

発行所 福島県中学校教育研究会

特別活動部会

発行人 福地 裕之



あいさつ

福島県中学校教育研究会

特別活動専門部長 福地 裕之

ある人の言葉。「教員は『夢と希望を与えることができる職業』であり、『教員としてどう生きるか！』が大切なんだよね。」

学習指導要領の基本方針の中にある教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力の3つの柱

- ①生きて働く知識・技能の習得
- ②未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成
- ③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養

に基づいて「生きる力」をより具体化していく必要がある。特別活動の目標においても、3つの柱をもとに「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」という三つの視点を手掛かりとしながら、実践していくことが大切である。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、県研究協議会県北・相双大会は中止となりましたが、特別活動部会公開授業では伊達支部員のみでの参加で、10月7日（木）、伊達市立桃陵中学校において開催され、研究収録一県北・相双大会として共有することとしました。

伊達市立桃陵中学校の発表は、「地域貢献ボランティアリーダー中間報告会」の公開授業と事後研究会でした。果樹栽培・特産物・特産物開発・防災・清掃の各ボランティアリーダーを中心に企画・立案し、ボランティアの募集・活動していく

ものであり、その中間報告会でした。SDGsにも関連してくるものであり、ぜひ、各学校での取組に生かしていただける実践であります。特に、授業者である桃陵中学校・佐藤清孝先生に感謝申し上げますとともに、伊達市立梁川中学校・二瓶匡弘校長先生には、地域貢献活動の重要性についてご助言いただきました。

令和4年度以降の研究主題が「様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を創ろうとする生徒を育む指導はどうすればよいか。」副主題が「互いのよさを尊重し、協働できる集団活動の工夫」です。

「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を整理して、今後、各支部・各学校の実態に応じた創意工夫ある取組により、研究を進め、子どもたちに夢と希望を与えることができる実践を期待しているところです。

次年度の県大会は会津大会として、猪苗代町立猪苗代中学校を会場に特別活動部会が開催されます。各支部の会員の皆様の意欲的な研究実践により、今年度の成果と課題を踏まえ、充実した研究協議会になりますことをご期待申し上げます。

最後になりますが、本会報の発行をもって令和3年度の県中教研特別活動部会の全事業を終えることができました。役員並びに会員の皆様の御協力に心より感謝申し上げ、あいさつといたします。

令和4年度の研究推進について

1 研究主題

『様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を創ろうとする生徒を育む指導はどうすればよいか。』

○ 副主題

令和4年度

互いのよさを尊重し、協働できる集団活動の工夫

令和5年度

集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

令和6年度

集団や社会の一員として、将来や自分らしい生き方を創造する力の育成

2 主題設定の理由

前年度までの研究主題『学校の創意工夫を生かし、深い学びを通してよりよい人間関係を築こうとする生徒を育む指導はどうすればよいか』の下、「人間関係形成」に焦点を当て研究を進めてきた。途中、新型コロナウイルス感染症の拡大により諸活動が中止される1年間もあった。

各支部においては研究主題・副主題に基づき研究が積み重ねられた。その結果、学級や学年、生徒会活動などにおいて、生徒の思いや考えが計画段階から反映され、独自の活動が行われた。さらに、活動を通して新たなリーダーが生まれたり、一部の生徒から始まった活動が、学校全体を巻き込むような形で広がったりすることが見られた。そして、集団の内部に見出された課題を全校生一人一人が「自分事」として捉えることの重要性が改めて確認された。その一方で「集団の課題」を全体に広げるための工夫が不十分であるという課題も残った。生徒が所属している様々な集団活動に、「自分事」として自主的・協働的に取り組むための研究は今後も継続して続けていく必要がある。

これらを踏まえ、生徒が様々な集団の中で、集団活動に「自分事」として自主的・協働的に

課題を解決できるようになるために、新学習指導要領の3つの視点「人間関係形成」、「社会参画」「自己実現」のうち、「社会参画」と「自己実現」に焦点を当て、研究を進めることとした。

3 研究副主題について

令和4年度～6年度の副主題を見通すと次のようになる。1年次で「互いのよさを尊重」する「集団」を創り上げ、「協働できる集団活動」を研究とする^註。そして、2年次でその「集団」に基づく「集団活動」を通して、「集団」の抱えている諸課題を見つけ出し、解決していく過程を研究する。さらに、3年次では、今まで学習してきたことを元に、「現状分析→方針提起→集団決定→実践→総括」というサイクルを動かすことで、「よりよい社会を目指す生徒の育成」に取り組むことになる。この3年間を通して、「集団」を意識して研究を継続することとした。^註：「集団」と「集団活動」との関係について、本稿では次のように捉えている。「集団」とは、「社会的な存在としての人間」が、所属する社会集団そのものを指している。つまり、「集団」とは、学級集団だけを指しているわけではない。この「集団」に所属して、様々な活動を行うことを「集団活動」と位置付ける。したがって、「集団」の質に応じた「集団活動」が行われることとなる。

(1) 第1年次「互いのよさを尊重し、協働できる集団活動の工夫」

集団活動に着目した研究がスタートする初年次である令和4年度は、集団のあるべき姿の研究を行うことになる。

集団には様々な考えを持っている個人が所属している。「互いのよさを尊重」するためには、その集団の質をよりよく向上させていく必要がある。そのためには意図的な働きかけをするリーダーが「集団」内に必要になってくる。初期の段階では、指導者がリーダーを行う場合が大半であろう。指導者がリーダーとして活動をしていく中で、「集団」の中に生徒のリーダーを見つけ出し、共に活動を作っていく。そして、リーダーとしてのものの見方や考え方を指導していくことで、見出された生徒が「集団」のリ

ーダーとして立ち上がってくる。ここで注意しなければならないことは、ここで見出されたリーダーは「指導者の鏡である」ということである。指導者が集団活動において、「過度の連帯による責任」を求めたり、「過度の競争を強いる」指導を行ったりした場合、誕生してくるリーダーも同じような価値観をもって行動するようになることを十分に認識しておく必要がある。

指導者は「集団」のリーダーが、「集団」全体の立場に立って行動しているかを見ていかなければならない。そのような指導者による「働きかけ」が行われることで、リーダーは視野が広がり、「集団」全体の立場を考えて行動するようになる。さらには、一人一人に目を向け、安心して自らの意思を表明できるようになる。所属している「集団」が一人一人にとって安心できるものとなれば、集団内に異質な他者がいたとしても「協働できる」関係が創り上げられると考えた。

(2) 第2年次「集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成」

2年次の研究は、1年次を踏まえた集団づくりの上に、「集団活動」へ「参画」した上で、「課題を解決する力の育成」を目指すことになる。ただし、1年次から2年次という段階論ではなく、1年次と2年次は交互に絡み合いながら発展していくものである。

生徒の思いや願いが反映される集団活動を行うためには、その「集団」内で一人一人が大切にされなければならない。そうでなければ生徒は安心して自分の思いや願いを表面に出すことができない。集団活動決定の合意形成に際しては、一人一人の意向を踏まえた全員の意思が反映されなければならない。一人一人が自覚をもって決定に参加していくことで集団活動に「自分事」として関わるができるようになる。

(3) 第3年次「集団や社会の一員として、将来や自分らしい生き方を創造する力の育成」

本研究主題に基づく研究の最終年度に当たる。そのために1年次と2年次の取組の集大成として位置づけられている。この段階で自らが所属している「集団(社会)」に「自分事」として関わるができるようになり、その上で今まで取り組んできた様々な活動を通して、自

分自身の将来や生き方と結びつけることができるようにしていくことになる。

集団活動が失敗した場合、生徒たちはすぐにあきらめてしまうことがある。しかし、指導者は、生徒が粘り強く周囲に働きかけを継続していくことで、自らの可能性を閉ざすことなく、他者、社会、自然などの環境との関わりの中で生きるという自覚を伴って成長できるようにしていきたい。そのためには、指導者が生徒とともに世の中とのつながりを十分に意識した活動を創り出すことが必要である。そして、生徒に自らの行動や集団活動が、世の中の諸課題との結びつきがあることに気づかせることが重要である。

4 令和4年度の研究の内容と方法

(1) 研究内容

研究にあたっては、次のような実践が考えられる。

- ① 生徒一人一人が集団の一員として行動し、一人一人のよさを実感させる活動
- ② 所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動
- ③ 集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとして育てていく指導者の働きかけ
- ④ 集団と指導者の対話を重視し、リーダー指導と話し合い活動に重点をおいた活動

その他にも、よりよい集団活動を行うための様々な活動が考えられる。

(2) 研究方法

社会や世界といった大きな集団だけではなく、学校や学級などの小さな集団にも目を向け、集団を高める視点をもって指導にあたるように心がけたい。

- ① 各学校や学級の集団の実態に基づき研究内容の明確化を図り、集団を高めるための実践研究を行う。
- ② 主題研修会などを通して、研究主題や副主題についての共通理解を踏まえ、学校間や学校内での情報交換や課題の共有などを行い、研究を深める。
- ③ 様々な人間関係形成のスキルを活用し、よりよい人間関係を構築するためのコミュニケーション能力の向上に努める。

令和4年度
会津大会 会場校紹介

「持続可能な未来を拓く，統合
『猪苗代中学校』づくり」

猪苗代町立猪苗代中学校



本校は磐梯山，猪苗代湖の自然豊かな環境のもと，創立58年の学校で，令和4年3月31日で閉校します。そして，令和4年4月1日，猪苗代町の猪苗代中学校，吾妻中学校，東中学校の3校が統合して統合「猪苗代中学校」として開校します。3つの中学校はそれぞれ地域とともに特色ある学校経営をしてきました。開校に向けて，統合中の学校経営・運営ビジョンづくりを進めてきました。キーワードをサステナブル（持続可能）とし，E S D / S D G s を教育活動の柱に据え，教育目標を「野口英世博士の遺訓（目的・正直・忍耐）を生かし，地域に学び，持続可能な未来を拓く猪中生」と考えています。

写真の新校舎は，県産木材が使用され，太陽光発電，地中熱交換空調，県産材ペレット暖房が整備され，サステナブルな学校となります。新校舎の後方に現校舎も写っています。新校舎は校庭に建設され，引っ越し後，現校舎は取り壊され校庭が整備されます。10月の会津大会では新校舎で会員の皆様方をお迎えすることになります。

ハード面の開校準備とともに，生徒たちも3校の生徒会役員が熟議を重ね，校章選定や生徒心得，新組織づくりなどに取り組んできました。また，各校の特色ある学校行事や地域素材を統合中にどのように繋いでいくか考えるなど，大変ですが，夢が膨らむ楽しい時間を過ごしています。

S D G s 17番目の目標は「パートナーシップで目標を達成しよう」なので，会津地区の特別活動部会員の知恵を借りながら，研究を推進していきたいと考えます。

開校初年度に県大会で生徒の取組を発表できる機会に感謝します。



〈2022年度以降発表支部割当予定表〉

年	2022年	2023年	2024年	2025年
発表	伊達	安達	石川	東西しらかわ
支部	郡山	岩瀬	田村	北会津
	南会津	相馬	耶麻	福島
		いわき	両沼	

〈令和4年度予定〉

5月19日	県専門部総会（主題研修）	福島市
7月下旬	各支部研究協議会（夏季）	各支部
10月6日	県研究協議会会津大会	猪苗代中
10～11月	各支部研究協議会（秋季）	各支部
1月下旬	支部長会議	郡山市
3月上旬	部報発行	

〈令和3年度組織〉

役職	氏名	地区	所属校
部長	福地 裕之	（福島）	福島四中
副部長	二瓶 匡弘	県北	梁川中
	高山 良勝	県中・南	明健中
	小林 稔	会津	若松二中
	高橋 知宏	浜	鹿島中
総務	鈴木 直	（福島）	野田中
研究委員長	二瓶 勉	（福島）	北信中
会計	鹿目 秀樹	（福島）	清水中

〈各支部特別活動専門部長〉

支部	部長名	所属校	会員数
福島	福地 裕之	福島四中	15
伊達	二瓶 匡弘	梁川中	9
安達	齋藤 直	東和中	6
郡山	高山 良勝	明健中	19
岩瀬	濱津 太	天栄中	23
石川	赤間 忠	玉川中	15
田村	坂本 貴光	都路中	50
東西しらかわ	星野 亜希	大信中	18
北会津	小林 稔	若松二中	14
耶麻	佐藤 芳文	喜多方一中	12
両沼	関根 宏房	三島中	1
南会津	鈴木 健	荒海中	27
相馬	高橋 知宏	鹿島中	54
双葉	猪狩 孝	川内小中学園	42
いわき	新井 達也	磐崎中	36
計			341

※ 会員数は所属会員数